

男女の話し方はどのように印づけられているか

— ポピュラー・カルチャーを手がかりに —

金水 敏

1. はじめに

言語における「有標性」とは、

- (1) 中心的・標準的 = 無標
周縁的・非標準的 = 有標

のような対立として捉えられることがあるが、言語学における本来の意味としては

- (2) 特別な標識がないもの = 無標
特別な標識が付いたもの = 有標

であったはずである。日本語の「女ことば」(女性語)は無標の「男ことば」に対して有標であると言われることがあるが(渋谷 2006, 中村 2007参照)、それはもっぱら(1)の意味であり、(2)の意味には沿わない場合がある。例えば、人称詞の体系では、男ことばは「ぼく」「おれ」を持つが、女ことばは持たないという点で(2)の意味では女ことばが無標ということになる。

本講演では、日本語・標準語の「男ことば」「女ことば」の自称詞を中心に、ジェンダーがどのように印づけられているのかということ、主に歴史的経緯として追いかけて、そのことを通じて女ことばを「有標」と捉えることの是非を問うとともに、近代日本語がジェンダーをどのように印づけてきた

かということを検証する。また、資料としては歴史的文献のほかに、ポピュラーカルチャー作品や大衆文化現象を多く用いる。

2. 現代日本語（標準語）の自称詞の体系

現代日本語（標準語）の自称詞の体系は概ね次のようになっている。

表1 金水 (2023b) より

FR	男性	女性
低	おれ (ぼく)	わたし (あたし)
中	ぼく (おれ)	わたし
高	わたし	
最高	わたし・わたくし	わたし・わたくし

ここでFRとはFace Riskのことであり、ポライトネス理論 (Brown & Levinson 1978/1987, その他) に準拠している。つまり、聞き手のネガティブ・フェイスを侵害するリスクの低い状況では「おれ」「ぼく」等が使用されるが、リスクが高い場合は「わたし」「わたくし」を使用することでリスクを回避しようとするのである。FRが低い場合は「くつろぎモード」、高い場合を「かしこまりモード」と呼ぼう。表1を見て気付かれるのは、男性専用とされる「ぼく」「おれ」がくつろぎモードで用いられる点である。かしこまりモードのわたし、わたくしは男女同形であるが、女性はくつろぎモードでの「おれ」「ぼく」に当たる形式が明示的ではなく、すべてのモードで「わたし」が使用される点である。「あたし」はくつろぎモードの形式と見ることもできるが、音声言語では「わたし」と「あたし」がしばしば混用されるという点で「わたし」との違いが鮮明ではない (後述する)。

この分布は、女性にはくつろぎモードにおける自称詞が男性の体系に比して欠けている (不分明である) ということを表しており、「女性の自称詞にはかしこまりモードの形式しか許されていない=女性は常にかしこまって話していることになる」と解釈することも可能である。

ただしこれはすべての日本語の体系に共通しているわけではなく、後に見るように方言では状況が大きく異なっている。また歴史的に見た場合、江戸・東京の一部の階層の言語を反映して作られた体系であると言える。道筋としては、女性にも許されてよかった「おれ」が女性から奪われ、また近代になって教養層の男性の中で生まれた「ぼく」が女性には与えられなかった、という過程を経て出来上がったものである。

3. 「おれ」について

3.1 歴史資料の「おれ」

日本語大辞典（以後、「日国」）の「おれ」の「語誌」欄には次のようにある。

- (3) (2) (= 自称詞の用法) は、中世以降使われ、特に近世以降多用された。貴賤男女の別なく用いられたが、近世の後半期頃から女性の使用が絶えた。同等もしくは目下に対する使用例が多いが、目上に対する用例もあり、江戸期までは現代語のように特にくだけたことばとはいえない。(JapanKnowledge 版、最終閲覧2025/01/23)

例えば中世末から近世の女性が用いた例を挙げる。いずれも、国語研の「歴史コーパス」から採取した。

- (4) a. 「なふはらたちや、わたのはおれをだまひて、親里へゆけと云程に、まことかと思ふたれば、(妻／虎明本狂言集 ひっくくり (引括)) (40-虎明1642_05008 5260)
- b. おはつ様のかの夜さり二階の梯子を踏みはづし、おれが胴骨踏まんした形見の痛さが、やう〜とこのごろ止んだに、(茶屋下女／近松浄瑠璃 心中二枚絵草紙) (51-近松1706_12003 6350)
- c. 座しきがあるとかいふと足元から鳥の立たやうにさはぎやあがらあ 何でもおれを馬鹿にしてゐるからだあ (おくま婆々／人情本 春

色梅兎与美) (53-人情1832_02006 36140)

「日国」の語誌には、「近世の後半期頃から女性の使用が絶えた。」とあるが、(4c)に見るように、近世末期の資料にも女性の「おれ」が現れる。ただし、いくぶん品のない老女である点には注意が必要である。また、中流以上の武士階級の男性が用いていた例を挙げておく。

- (5) ○五左様サマア予(おれ)が乗(のる)引戸駕籠(ひきどかご)一挺(いつてう)本馬(ほんま)一疋(いつひき)軽尻(かるしり)一匹(いつひき)両掛(りやうがけ)二荷(にか)其位(そのくらい)の物(もん)だ
(旗本クラスの武士⇒下男／『春秋雑誌 会話篇』第十七章)

江戸・東京では、元来「おれ」が広く用いられていた可能性があるが、次第に若い女性、上流の女性から「おれ」が失われていったことが想像される。

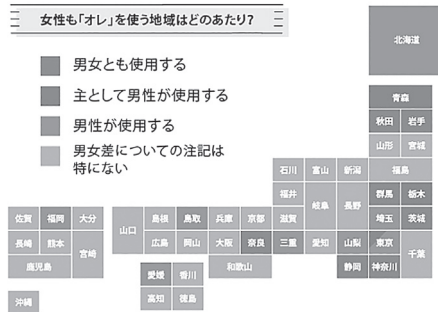
3.2 方言の「おれ」

国立国語研究所の「ことば研究館」というサイトに、「質問：東北のある地方で、女の人が自分のことを「オレ」と言っているのを聞きましたが、方言には男女差がないのでしょうか。」という質問が寄せられていた(尾崎喜光担当。この記事の初出は『新「ことば」シリーズ』16号(2003, 国立国語研究所)で、若干の修正を加えた上で公開しているとのことである)。

回答として、次のように書かれている。

西日本を中心にそもそも「オレ」を使わない地域がありますが、こうした地域を除く「オレ」を使う地域について見ると、「男女とも使用」という注記は岩手県・秋田県・茨城県・群馬県・神奈川県・静岡県・奈良県に、また女性の使用を暗示する「主として男性が使用」という注記は青森県・栃木県・東京都(奥多摩)に見られます。どうやら東北や首都圏を除く関東に多いようです。逆に「男性が使用」という注記は、北海

道・埼玉県・東京都・山梨県・三重県・鳥取県・愛媛県・福岡県といった首都圏や西日本のところどころに認められます。また、男女差についての注記が特にない地域は西日本に多いようです。注記がないということは、「オレ」の用法が共通語と異ならないこと、すなわち男性が用いる表現であることを暗に示していると思われまので、西日本における男性使用の傾向性はさらに強まりそうです。



私が個人的に聞いた範囲では、西日本の日本海側では使用されることもあるようであり、女性の「おれ」の使用域はかなり広いという印象がある。歴史資料と重ね合わせて考えると、近世期以降、首都圏や関西を中心に都市部で女性の「おれ」が失われていったのであろう。

4. 「ぼく」について

4.1 先行研究

れいのるず (2018: 87) では、「江戸期には徳川幕府の漢学奨励政策によって有文字人口が急増し、「拙者」を代表的な例とする漢語自称詞が学者、武士その他の識者たちの間に広く普及した。しかし、江戸中期には新たな漢語自称詞「僕」が出現し、和語自称詞と「拙者ことば」を中心にした自称詞パラダイム（権力原理タイプ）は、「僕」を主体とするパラダイム（連帯原理タイプ）

ブ)にシフトしていった。」としている。また(友田 2023:105-106)では、松下村塾で「松蔭は弟子たちに〈僕〉を使った書簡を頻りに送り、彼等もしばしば〈僕〉を使って答えた。「共に学ぶ仲間」としての絆を最大限に発揮したのが松下村塾であり、それを言語面で支え、象徴もするのが〈僕〉という自称詞だったのである。」としている。このように、幕末の士族層、特に長州の若い士族の男性たちが、仲間内の自称詞として「僕」を広めた可能性が高い。「僕」はやがて「書生語」として明治時代に広まっていく。小松(1973)では、「書生言葉の特徴」として次の諸点を挙げている(金水 2003/2023, 金水2010も参照)。

- (6) ・「ぼく」「吾輩」を多用。
・「きみ」を多用。
・命令表現として「たまへ」「べし」を多用
・あいさつ言葉として「失敬」
・漢語・外来語の多用

4.2 「ぼく」を用いた女性はいたか？

なお、先に引いた友田(2023)では、河竹黙阿弥の『富士額男女繁山』(1877・明治10年初演)で主人公の男装の女書生「繁山」が「僕」を用いた例を示している。また、二葉亭四迷の小説『浮雲』(第二篇 第十回 負るが勝)で、下宿先の娘の「お勢」が「僕」を使う例、読売新聞の読者投稿「開化百馬鹿の四」で軽薄な娘が「僕」を使う例を示している。いずれも男性の書き手によるもので、「僕」を使う女性に対しては冷やかな視線で書いており、当時「僕」を使う女性がいたとしても一般的ではなく、男社会の中では冷笑の対象となったであろうと想像させる。

4.3 礼法要項

1941年(昭和16年)、文部省は『礼法要項』という小冊子を発行している。生活のさまざまな場面における礼儀作法を示したもので、その「言葉遣ひ」の項に次のように書かれている(金水 2003/2023aも参照)。

- (7) ・自称は、通常「私」を用ひる。長上に対しては氏又は名を用ひることがある。男子は同輩に対しては「僕」を用ひてもよいが、長上に対しては用ひてはならない。
- ・対称は、長上に対しては、身分に応じて相当の敬称を用ひる。
 - ・同輩に対しては、通常「あなた」を用ひ、男子は「君」を用ひてもよい。

ここでは、男子が同輩に対して「僕」「君」を用いてよいとしているが、裏を返すと、女子は「私」「あなた」しか用いてはいけない、ということになる。現に、女子学生向けに『女子礼法要項』も発行されているが、ここでは「男子は…」という部分を削除した形になっている。

5. 非対称性の背景

ここでは自称詞を例に取り上げたが、男ことばと女ことばの非対称性には、命令形の有無、終助詞・感動詞の違い、コピュラ「だ」の脱落現象等、いくつかの側面があり、下記のように指摘されている。

- (8) 一般に、女性的な表現は、断定を避け、命令的でなく、自分の考えを相手に押しつけない言い方をする、といった特徴を持つ。これに対して、男性的な表現は、断定や命令を含み、主張・説得をするための表現を多く持つ。

益岡隆志・田窪行則（1992：222）

つまり、男ことばが能動的・支配的な言語活動に向いているのに対し、女ことばは受動的・従属的な言語活動に向いていると言える（平野 2023 も参照）。

このような非対称性が生まれた背景を考える時、近世以前と近代以後に分けて考える必要がある。近世以前は基本的に身分社会であり、国民を男と女に分けるという発想はなかった。身分によってことばの性差はさまざまであ

り、武士階級はもちろん男女の差が激しかったが、町民層、農民層は決してそうとは言えなかった。近代以後、初めてジェンダーによって国民を分ける発想が生まれ、女子教育という課題が生じた。下記の樺山文部大臣の発言を見るとおり、明治時代の中頃以降には、「良妻賢母教育」の推進が期待されていた（土田 2014, 小山 2023も参照）。

- (9) 高等女学校ノ教育ハ其生徒ヲシテ他日中人以上ノ家ニ嫁シ、賢母良妻
タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ
(コラム「高等女学校における良妻賢母教育」)

近代の女ことばの状況は、このような良妻賢母教育の目標によく沿ったものと言える（中村 2007）。つまり、男性は家庭の外で国のために働く一方で家長として家を治め、女性はその男性に服従し、支える一方で、家庭を守り、よい子孫を育てていくという思想である。しかしながらこのような家庭観が日本全国どこでも成り立つようなものではないことは明らかである。農村や漁村のように男女が助け合って働かなければ生活ができない地域も多数存在する。そのような地域では、標準語の男ことば・女ことばは生活のことばとしてあまりふさわしくない。良妻賢母教育が成り立つのは都市部の一定以上の水準の家庭に限られるのであり、非都市部では理念以上の価値を持たない。極限すれば、フィクションであるとさえ言える。それは標準語という概念がフィクションであることと軌を一にする。このことと、自称詞の「おれ」を女性も使う地域が非都市部に偏ることとは直ちに同一視できないが、関連を探りたいところである。

6. 非対称性を埋めるもの

自称詞に話を戻す。標準語では、女性は「わたし」を常に用いる＝常にかしこまりモードで話すことを強要されていると見るができることについては既に述べた。しかし一方で、男性の「おれ」「ぼく」レベルに相当する自称詞の欠落を補う語彙項目が近年目に付くようになってきている。いずれも、非

標準的用語と考えられているために、表立って議論されることの少なかった項目である。すなわち、「あたし」、「うち(ら)」、「イリイズム」(固有有名による自称)、女性による「ぼく」使用である。以下、個々の例について検討していく。

6.1 あたし

「あたし」は「おれ／ぼく」レベルに相当する、くつろぎモードの自称詞と言える。ただし、「わたし」と発音が近いため、語彙項目としての「わたし」からの心理的な分離は十分とは言えない。そういう意味では、「わたし」の亜種に留まるとも言える。

ちなみに、『日本国語大辞典』第2版(JapanKnowledge版,最終閲覧2025/01/28)によると、仮名書きの最古例として「わたし」は1693年の『男重宝紀』、「あたし」は1887～1889年の『浮雲』(二葉亭四迷)となっている。『浮雲』では、主人公の文三を下宿させているお政の使用が多数見られ、お政の娘のお勢がそれに次ぐようである。三好(2011)に、絵本等で「あたしゃ～だよ」という文型を用いる若いおばあさん(ないしおばさん)には江戸語の影響が色濃いという指摘と符合する。なお、現実の発音上のヴァリエーションとして、「あちし」「あーし」「あっし」等も耳にされる。

6.2 うち

関西方言では、女性特有の自称詞「うち」があって、今日でも用いられている。谷崎潤一郎の『卍』(1931年刊)、『細雪』(1949年刊)に用例が多数あるほか、はるき悦巳のマンガ作品『じゃりン子チエ』(1978～1997年連載)の主人公「チエ」の自称詞は「うち」である。ウチ・ソトのウチを語源とし、「家の内側にいるもの＝女」という意味で用いられ始めたと考えられる。

なお、関東でも「うち」および複数形の「うちら」が用いられることが知られるようになってきた。特に、いわゆる「ギャル」文化との関連が指摘されるが、男性も使用するようである。

参照したサイト(Yahoo知恵袋)によると、ギャル語の「うち(ら)」は90年代ごろから使われ始め、現在、関西弁との繋がりほとんど意識されない

とのことであるが、詳細な調査が必要である。関西で「ギャル芸人」を名乗る「エルフ」という漫才コンビの「荒川」は、単数では「あたし」、複数系として「うちら」を用いている（『エルフ荒川のみめぐり まいにち、GAL!』）。

6.3 イリイズム（固有名による自称）

幼児が固有名を自称詞として用いることは、多くの言語で見られる普遍的な現象として知られている。ポピュラーカルチャーでもよく見られる。これをイリイズム (illeism) と言う (Zwicky 2008, Lovrić 2011, Woiciewowicz 2018 参照)。

日本では、幼児だけでなく、二十代くらいまでの女性でもこのイリイズムを用いるケースがしばしば見られる。これは、「幼さ」が女性にとって美点に捉えられるからという理由が考えられるが、女性のくつろぎモードの自称詞の一つであるという説明も成り立つところである。青年層以上の男性にはほとんど見られないが、これは幼さが男性にとっては欠点になるということに加えて、「おれ」「ぼく」があるから、とも説明できる。

「幼さ」だけでは説明しにくい実例として、アコーディオンとヴォーカルの姉妹ユニット「チャラン・ポ・ランタン」の姉の「小春」の例が挙げられる。彼女は現在35歳であるが、YouTubeの自身のチャンネルでは自称詞に「小春」を多く使用している（「あたし」と併用）。彼女は幼さを売りにするようなタイプではないので、独自のくつろぎモードの自称詞であると捉えられる。

6.4 ぼく

自称詞「ぼく」を用いる女性を「ぼく少女」「ボクッ子」などと称する。マンガやアニメなどのポピュラーカルチャーの世界では、70年代あたりから見られるようになった。(cf. 西田 2011)。当初、男性的なキャラクターを持つ少女という設定が多かったが、今日では特にそのような属性がなくとも「ぼく」を使う登場人物がよく見られる。

現実に「ぼく」を用いる有名人として、モデル・タレントの「春名風花」さん、アイドルの「あの」さんなどがいて、その対談やインタビューは大変興味深い発言等が見られる。あのさんの語るところによると、女性として見

られることに対する羞恥心が大きく、「わたし」を使用すると「女」になるように耐えがたかったが、「ぼく」はネットゲームで自称詞として用いていて、アイドル・デビューをした際に、「ぼく」でいいか、と思って使い続けているとのことである。

松村栄子の小説『僕はおかぐや姫』は、少女の自称詞をめぐる小説といってもよい作品で、揺れ動く思春期の少女の心情と自称詞の関連が繊細に描かれている。

7. まとめ

現代日本語・標準語の自称詞を中心に、男女の言葉遣いの非対称性を見つけた。中村（2007）の言うように、女ことばは非標準的な言語として不可視化されがちであるが、そのことと「有標性」とは直ちに結び付かない。男性の自称詞「おれ」「ぼく」は主に男性しか使用せず、分布上は男性の自称詞のほうが有標的である。歴史的に見ると、江戸時代には男女を問わず広く「おれ」が用いられていたが、江戸の士族層や上層町人を中心に女性が「おれ」を用いなくなって男性専用となった（下層町人や地方では依然として用いられた）。一方、「ぼく」は明治維新を牽引した士族層が用いはじめ、書生語となってやがて一般男性および少年語として広まっていったが、女性が用いることには強い抑制がかかった。

標準語の男女の自称詞の体系は、男性が支配し、女性が服従する「良妻賢母」的な性別役割と親和性が高いが、これに対抗するかのように、女性の「くつろぎモード」における新しい自称詞「あたし」、「うち」、イリイズム（固有名による自称）、「ぼく」が広まりつつあるが、歴史の比較的古い「あたし」を除いて、しばしば違和感が表明されたり、揶揄されたりといった抵抗を社会から受けやすい。一般に、女性の話し方に関しては絶えず批判的になる傾向にあるが、それは「伝統」から逸脱する女性の表現が、「伝統」に対する不服従の表明として見なされやすいからである。

かつて19世紀末の女学校で自然発生した「てよだわ」言葉＝女学生ことばは、マスメディアの中で男性知識人によって非難の対象となった（本田 1990,

金水 2003, 渋谷 2006, 中村 2007)。これは、当時の男性の規範から逸脱する、女性の「くつろぎモード」のスタイルであったがゆえに、新しい“女学生”の「不服従」の象徴として攻撃されたのである。なお、中村 (2007) が言うように、このスタイルは男性作家によって「性別化」「選択」「否定」「セクシュアリティ化」の過程を経て日本語のスタイルに取り入れられ、一般化していった。しかし一方で、女性読者はこのスタイルをエンターテインメントとして活用した。それは今日に至るまで続いている (例：お嬢様系 Vtuber 「壱百満天薔薇サロメ」)。

[参考文献]

- 金水 敏 (2003/2023a) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。
- 金水 敏 (2010) 「I-2 「男ことば」の歴史—「おれ」「ぼく」を中心に」中村桃子 (編) 『ジェンダーで学ぶ言語学』 pp. 35-49, 世界思想社。
- 金水 敏 (2022) 「ポライトネスとキャラクター」近藤泰弘・澤田淳 (編) 『敬語の文法と語用論』 pp. 342-358, 開拓社。
- 金水 敏 (2023b) 「役割語のジェンダーとパワー」『社会言語科学』 26-1: 37-48, 社会言語科学会。
- 金水 敏 (2024) 「二次元世界の話し方 第3回」『日本語学』 43-2: 122-128, 明治書院。
- 金水 敏他 (2011) 「第13章 大阪大学卒業論文より」金水 (編) 『役割語研究の展開』 pp. 249-262, くろしお出版。
- 小松寿雄 (1973) 「一読三歎当世書生氣質」の江戸語的特色」埼玉大学教養学部編『埼玉大学紀要』 9: 17-28。
- 渋谷倫子 (2006) 「日本語における「近代的」セクシュアリティの形成」『ジェンダー史学』 2006年第2巻, pp. 49-62, ジェンダー史学会。
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社。
- 友田健太郎 (2023) 『自称詞〈僕〉の歴史』河出新書 064, 河出書房新社。
- 中村桃子 (2007) 『「女ことば」は作られる』ひつじ書房。
- 西田隆政 (2011) 「ボク少女」の言語表現：常用性のある「属性表現」と役割語との接点」『甲南女子大学研究紀要. 文学・文化編』 48, 13-22, 甲南女子大学文学部事務室。
- 平野獅子 (2023) 「女ことばってなんなのかしら? 「性別の美学」の日本語」河出新書 063, 河出書房新社。
- 本田和子 (1990) 『女学生の系譜—彩色される明治』青土社。
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版。
- 三好敏子 (2009) 『「おばあさん」の役割語』大阪大学文学部卒業論文。金水他 (2011) に要約が所収。
- れいのるず秋葉かつえ (2018) 「自称詞の歴史社会言語学的研究—「拙者」から「僕」へ—」

- 『ことば』39, pp. 87-104, 現代日本語研究会.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1978/1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge. Cambridge: University Press. (田中典子監訳・斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳 (2011). ポライトネス ― 言語使用に於ける、ある普遍現象 ―. 研究社.)
- Lovrić, Marija (2011) 'Ileizmi ili što je zajedničko roditeljima jednogodišnjaka i Milanu Bandiću' [イリイイズム, 即ち一歳幼児の両親とクロアチア政治家ミラン・バンディッチとで何が共通なのか], "Hrvatistika: studentski jezikoslovni časopis" [クロアチア 語学: 言語学学生雑誌], Vol. 5, No. 5, pp. 111-122. アクセス <http://hrcak.srce.hr/file/121497> (最終閲覧2016/12/23).
- Wojciewicz, Tomasz (2018) 『『海辺のカフカ』の原書とポーランド語翻訳書との比較・対照』金水 (編) 『村上春樹翻訳調査報告書 (1)』所収.
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/68235/?lang=0&mode=0&opkey=R173804732526566&idx=23&codeno=&fc_val=&chk_st=20&check=000
- Zwicky, Arnold (2008) 'Blame it on Elmo.' "Language Log," September 13, 2008 @ 1:12 pm. アクセス <http://languagelog ldc.upenn.edu/nll/?p=577> (最終閲覧2016/12/23).

【資料】

- 「歴史コーパス」国立国語研究所
国立国語研究所 (2024) 『日本語歴史コーパス』(バージョン2024.3, 中納言バージョン2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (最終閲覧2024/07/02)
- 「ことば研究館」国立国語研究所
(<https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-144/> 最終閲覧: 2025/01/23)
- 『春秋雑誌会話篇』
早稲田大学図書館
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_c0763/index.html
- Japanknowledge
<https://japanknowledge.com/psnl/search/basic/>
- コラム「高等女学校における良妻賢母教育」
内閣府・男女共同参画局
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/zentai/html/column/clm_03.html
- Yahoo Japan 知恵袋
https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1273040597
- 『エルフ荒川のひめくり まいにち、GAL!』
2023年3月発行
発行: ヨシモトブックス 発売: 株式会社ワニブックス
- 『女子礼法要項』
全国高等女学校長協会 (1942/2024) 『[復刻版] 女子礼法要項』ハート出版.

- 「僕はかぐや姫」
松村栄子. 僕はかぐや姫／至高聖所 (Japanese Edition) (Kindle の位置 No.404-410). Kindle 版.
- 「壱百満天原サロメ」
壱百満天原サロメ / Hyakumantenbara Salome
<https://www.youtube.com/@HyakumantenbaraSalome>
- 「チャラン・ポ・ランタン」
Charan Po Rantan official
https://www.youtube.com/@charanporantan_official
- ギャル語の「うちら」
<https://www.tiktok.com/discover/%E3%81%86%E3%81%A1%E3%82%89%E5%AD%90%E3%82%AE%E3%83%A3%E3%83%AB%E5%8F%AF%E6%84%9B%E3%81%84-%E9%9F%B3%E6%BA%90>
- 「春奈風花さん」(はるかぜちゃん)
はるかぜちゃんの「ぼく」は日本語の進化? 専門家解説がかなり深い
<https://withnews.jp/article/f0190203002qq0000000000000000W03j10101qq000018706A>
- 「あのちゃん」
<https://www.tiktok.com/@ano.fan7/video/7339186551705898241>

(きんすい さとし・大阪大学名誉教授)